

選手の活躍願い、採火

東京2020パラリンピック 松花堂庭園・美術館で式典



応援メッセージが書かれた竹の採火台

8月16日、東京2020パラリンピック聖火のもととなる火をおこす採火式が、松花堂庭園・美術館で開催されました。パラリンピックでは、採火が全国各地で行われ、



ランタンに火を灯す満若会長（左）と堀口市長（右）

京都府では、16市町で採られた火を一つに集めます。

採火台はNPO法人八幡たけくらぶの協力を得て、八幡の竹を組んで制作。その竹には、障がい事業所など各当事者団体の皆さんから、「みんな精一杯がんばって」「コロナ禍の中も頑張ってきた選手の方々の活躍こそが私たちの希望の光です」など、選手の活躍を願うメッセージが手書きされています。

式典が始まると、採火台から岡田議長が竹の棒で採火。その火は各障がい者団体の会長へリレー方式でつながられ、最後に受け取った八幡市身体障害者団体連合会の満若龍峰会長と堀口市長によって、大切にランタンへ灯されました。

水辺の生き物 触れて学ぶ

8月7日、淀川河川公園で木津川に住む生き物や自然を学ぶ「八幡の背割堤とグリーンインフラ『水辺の生き物探検隊』」が開催され、小学生と保護者など8組が参加しました。

同イベントは、子どもたちが川遊びを通じて楽しく自然を学べるようにと、琵琶湖・淀川流域圏連携交流会の協力により実施。

はじめに、参加者はさくらであい館で、木津川の今と昔の姿などについて勉強。外来種の生き物がいなかった頃には、日本固有種

の珍しい魚であるイタセンパラがいたことなどを学びました。

その後、みんなで川に入って生き物探し。網ですくいながら川底を探すと、トウヨシノボリやミナミヌマエビのほか、外来種のコグチパスが見つかるなど、生き物を観察して楽しみました。

ほかにも、フナのひれの位置を絵で描くクイズに挑戦したり、見つけた生き物を生息種リストで確認したりするなど、体験を通して川の自然を学びました。

淀川河川公園 親子で楽しむ



フナの体のつくりを観察する子どもたち

まちの話題

「このページでは、市民の皆さんの活躍やまちの話題などを紹介しています。身近な話題や、広報紙についての意見を、秘書広報課までお寄せください。」

つながり通して豊かな未来へ

「第五回徒然草エッセイ大賞」の記念講演会が8月21日、生涯学習センターで開催され、元京都大学総長で総合地球環境学研究所所長の山極壽一さん（同賞選考委員長）が「つながりとは何か」をテーマに講演しました。

ゴリラ研究の第一人者の山極さんは、ゴリラは目を見て相手の気持ちが分かる「共感能力」が高い生き物だと紹介。ただ、人間と一緒にご飯を食べる「共食」、子どもを育てる「共同保育」が不可欠になったことから、「それ以上に

徒然草エッセイ大賞 山極元京大総長が講演

共感能力を高める必要があった」と説明しました。また、コロナ後の社会では言葉だけのコミュニケーションではなく、五感を通じた交流と情報機器をうまく、賢く使うことが必要だとし、それによって「我々は豊かな未来をつくることができるのでは」ないでしょうか」と来場者に言葉を投げかけていました。同賞の募集期間は10月14日まで。詳しくは専用ホームページ（<https://www.tsurezure-essay.jp/>）をご覧ください。

『ヤワタカラ』で特産品PR

「老舗和菓子屋やカラス型飛行器を発明した二宮忠八、エジソンとのゆかり…。八幡に移り住んで40年ほどになる結城さんの口からは、八幡のいいところが次々と出てきます。

応募のきっかけは、奥様からの「ネーミング募集してるよ」の一言。八幡の特産品をPRするための名称とあって、「モノやヒトは八幡にとっての宝物」との思いから、八幡と宝物をかけて『ヤワタカラ』を考案しました。

名称は5分ほどで思いついたそうで、そんな中でも「シンプルでわかりやすく、子どもからお年寄りまで覚えやすいように」とのこだわ

りも。「八幡市はまだまだ発展途上で、みんなが知らないおもしろい歴史やおいしい食べ物がいっぱいある」と話す結城さん。「訪れた人にいろんなところを巡って、おいしいものを食べて、お土産を買ってもらって、その一助になれば」と『ヤワタカラ』の考案者として、八幡のさらなるにぎわいを願います。

本コーナーでは、市にゆかりのある人物や団体等を紹介していきます。自薦・他薦問わず、紹介希望者を募集していますので、詳しくは、市ホームページをご覧ください。か、秘書広報課へお問合せください。



結城 伸夫さん

△プロフィール▽
八幡の特産品をPRするやわたブランドの名称「ヤワタカラ」の考案者。趣味はテニス、登山、釣りなどアウトドア派。